

〔編 集 後 記〕

今回お届けする第40巻には本年度開催された研究会の講演内容を題材とした論文1編、腐植酸研究の現況の報告が1篇、わが国の食料自給を巡る国際的な状況を論じた論文1編と多岐にわたる内容が盛り込まれた。

まず、加藤氏の「資源循環型農業のための家畜ふん堆肥中肥料成分の有効利用」では、これまで家畜ふん堆肥が肥料の標準量施用に上乘施用されてきたために、その肥料成分が必ずしも効率良く活用されなかったり、家畜堆肥の連用によりリン酸やカリウムが過剰に蓄積して堆肥の継続的施用が難しくなっている状況をふまえて、その技術課題の解決に向けて全国的に推進された研究を概観しつつ、その研究成果の集約として混合堆肥複合肥料の製造が提案されている。家畜ふんの合理的利用の指針を示した銘記すべき論文である。

次に、わが国にける腐植物質の生理活性に関する研究の第一人者である森山氏には、「腐植物質の生理活性に関する最近の知見」と題して、最近の国内外の研究状況と森山氏の研究グループが現在進めている研究の概要をまとめていただいた。最近の生理活性の解析には各国で遺伝子解析の手法を導入した論文が多数発表されているが、ここに掲載された成果はわが国で行われた稀有な試験事例である。

次に、今まさに TPP（環太平洋経済連携協定）が発効され、さらに2月には日 EU・EPA（日本・欧州連合経済連携協定）が発効される運びである。すでに牛肉やチーズ、ワインの値下げセールが大々的に宣伝されている。有馬氏の「WTO 自由貿易体制と食料自給・食料への権利・食料主権」では、国際的な枠組みのなかで、取り交わされていく経済連携協定なるものが、わが国の食料自給や食料への権利を奪い、わが国の農業の発展を危うくするものであるが、このような状況も「命と人権を守る世界的な運動の広がりにより克服できる可能性がある。」と将来の展望を示している。

〔尾和尚人 記〕